

中国の歴代の王朝の中でも、最後の清朝は中華帝国の完成態であった。徹底した文書主義、能力主義を加味した合理的な皇位継承制度、悪魔のように狡猾な統治システム、等等。清の時代には、唐の則天武后や楊貴妃のような外戚の専横も、後漢や明のような宦官の跋扈も、一度もなかった。

が、最も完成された制度は、システムの硬直化と表裏一体であった。清の末、想定外の事態に瀕した時、西太后という「想定外」の皇太后が出現した。彼女は傾国の悪女だったのか、中華帝国の衰退に抵抗した女傑だったのか。歴史を再考することで、高い完成度と想定外の事態に対応できない硬直化が進む現代日本社会に通じる教訓を探る。(講師記)

ポイント

- 嫁についての日本のことわざ…「嫁を見るより親を見よ」
「嫁が姑になる」
「嫁は下から婿は上から」(嫁は自分より低い家柄が、婿は自分より高い家柄からとるのがよい。「嫁は流しの下から貰え」も同様の意)
- 母は子をもって貴し…出典は『春秋公羊伝』隠公元年の「子以母貴、母以子貴」。
- 治世、乱世、衰世…龔自珍(1792-1841)の「三世」説。
- 物極必反…物、極まれば必ず反す。中国のことわざ。
『鶡冠子』環流「美悪相飾、命曰復周。物極則反、命曰環流」。
司馬遷の『史記』田叔列伝「夫月滿則虧、物盛則衰、天地之常也」。
『菜根譚』「敬器以満覆。」敬器(いき)は満つるを以て覆(くつがえ)る。
- 過剰適応…過度に現在の環境に適応すると、環境の激変についてゆけなくなり、かえって不利になること。
- 王朝の「平均寿命」…中国の歴代王朝の寿命は十世代、約3百年が限界
- 祖制…帝王の祖宗がさだめた決まりやしきたり。明清以降にやかましく言われる。
- 垂簾聽政(すいれんちょうせい)…「すだれを垂らして政治を聴く」。皇帝が幼少の場合、皇帝の妻や母親、祖母が皇帝の後見人となり、摂政政治を行うこと。「すだれ」は言葉のあやで、実際は屏風なども使った。
- 曾國藩(1811-1872)の名言「盛世創業垂統之英雄、以襟懷豁達為第一義。
末世扶危救難之英雄、以心力勞苦為第一義。」
盛世創業垂統の英雄は襟懷豁達を以て第一義となし、
末世扶危救難の英雄は心力勞苦を以て第一義となす。

辞書類からの引用

しん【清】大辞林 第三版の解説

中国最後の王朝(1616～1912)。女真族出身のヌルハチが諸部族を統一して後金(こう

きん)国を建て、その子ホンタイジ(太宗)が国号を清と改めた(1636年)。順治帝の時、明の滅亡に乗じて中国内地に進出、北京に遷都。康熙(こうき)・雍正(ようせい)・乾隆(けんりゅう)の頃最盛期を迎えたが、以後農民反乱の続発と欧米列強の外圧とに苦しみ、辛亥(しんがい)革命によって滅んだ。

せい - たいこう【西太后】デジタル大辞泉

[1835 ~ 1908] 中国、清の咸豊(かんぼう)帝(文宗)の妃で、同治帝(穆宗)の生母。諡号(しごう)、孝欽(こうきん)。慈禧(じき)皇太后とよばれた。同治帝・光緒帝(徳宗)の摂政となって政治を独占。変法自強運動を弾圧して光緒帝を幽閉、義和団事件を利用して列強に宣戦するなど守旧派の中心となった。シー=タイホウ。

西太后の名前

生前から死後にかけて、さまざまな呼び方があるが、個人名や幼名については真偽不明なところもある(近現代の中国の要人における「個人情報」秘匿傾向)。

姓は葉赫那拉(これは確定) 個人名は不詳。蘭兒?(幼名) 杏貞? 玉蘭?

慈禧太后 老仏爺 孝欽顯皇后(孝欽) 聖母皇太后

孝欽慈禧端佑康頤昭豫莊誠壽恭欽獻崇熙配天興聖顯皇后 等々

用語

○清の後妃の階層制…「内庭主位」皇后以下8階級

皇后1人 皇貴妃1人 貴妃2人 妃4人 嬪6人 貴人 常在 答應

○選秀女…旗人の少女を対象に、三年毎に皇帝が執り行う后妃候補選抜試験。皇帝の母親候補として優秀な女性を確保することで暴君や愚帝の出現を防ぐ効果と、歴代王朝が悩まされた「外戚の専横」を解消する効果があった。

○太子密建…「太子密建法」とも。第5代皇帝・雍正帝が始めた次期皇帝の指名方法。皇帝はあえて皇太子を決めず、皇子たちのなかで最も実力のある者の名前を次期皇帝として紙に書いて密封し、その封書を誰にも見せず隠しておく。皇帝が死去、ないし危篤になった段階で封書を開封し、次期皇帝を公開する、という制度。次期皇帝をぎりぎりまで秘密にすることで、皇子たちが自己研鑽に励み、また、現役皇帝と次期皇帝のあいだの政治的対立を防ぐ効果があった。理論的にはすぐれた制度だったが、太子密建で選ばれた皇帝は乾隆帝、道光帝、咸豊帝の三代だけで、制度として成功したとは言えなかった。

○奏摺(そうしゅう)…皇帝が官僚組織から受け取る文書は、中央官庁の精査を経る「題奏」(題本)と、地方官などからダイレクトに届く「摺奏(奏摺)」の二つのルートがあったが、雍正帝以後の皇帝は「奏摺」を重んじ、地方官から積極的に生の情報を収集し、皇帝自身が上奏書に朱筆でコメント(硃批)を書き加える、という徹底した文書主義の政治を行った。

○起居注…東アジアの歴代王朝で、皇帝の起居や言動を24時間体制で記録する官撰記録。皇帝が死ぬと史官は起居注の一部を整理し、その皇帝の一代記「実録」として公開した。

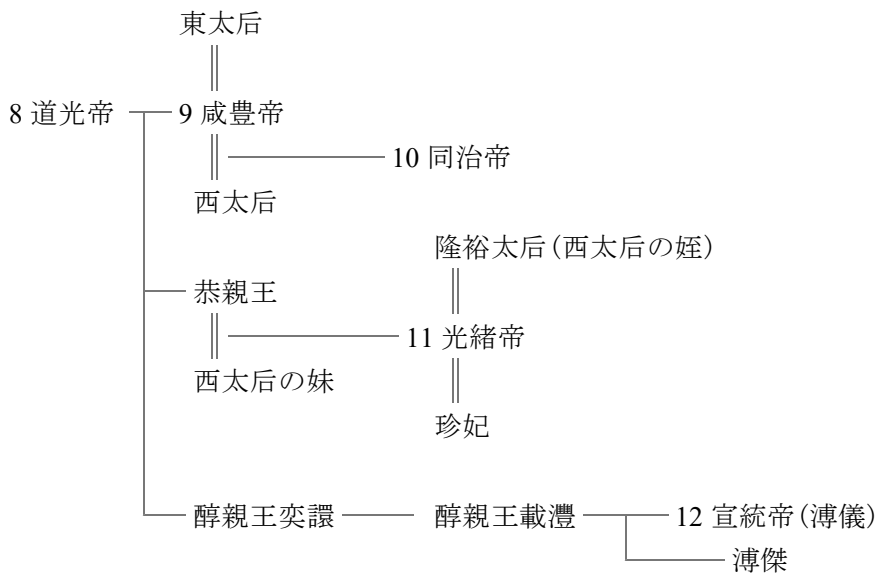
○故宮…故宮博物院。北京の中心部にある。清代には皇帝の居城「紫禁城」だった。

○円明園…北京市にあった離宮の遺構。アロー戦争のとき英仏連合軍によって破壊された。
 ○頤和園（いわえん）…北京市にある離宮で、西太后は長いあいだここに住んでいた。現在は有料の公園。1998年、ユネスコの世界遺産に登録。

西太后の年表

- 1835年 清の中堅官僚の家に生まれる。出生地は北京説が有力。
- 1840年 アヘン戦争
- 1851年 十七歳で「選秀女」。太平天国の乱
- 1852年 十八歳で「蘭貴人」に。皇后は、咸豊帝の「潜邸」時代の正妻(のちの東太后)
- 1853年 父・恵徴が免職されて無念の死
- 1856年 咸豊帝の長男(後の同治帝)を生む。アロー戦争(~ 1860)
- 1861年 咸豊帝、熱河で死去。
- 1874年 同治帝、死去。西太后は自分の妹の子(光緒帝)を次期皇帝とする。
- 1881年 東太后、急死(享年 45)
- 1894年 日清戦争
- 1898年 戊戌の変法
- 1900年 義和団事変(北清事変)
- 1904年 日露戦争
- 1908年 西太后死去。宣統帝(溥儀)即位
- 1911年 辛亥革命

略系図



清朝や日本ではヌルハチを初代皇帝に追尊し、最後の宣統帝溥儀を第 12 代としてカウントする。現代中国では、清朝の歴代皇帝について「入関後」第何代、というカウントも併記する。溥儀は入関後第 10 代の皇帝である。

西太后を演じた日本人女優

藤間紫…舞台「西太后」(平成7年9月/新橋演舞場) 作 孫徳民 演出 市川猿之助
出演 藤間紫/風間杜夫/村井国夫/市川段四郎/小山明子/菅原謙次/中村歌六
田中裕子…NHK テレビドラマ「蒼穹の昴(吹き替え版)」2010年 原作 浅田次郎

西太后とゆかりがあるとされるグッズ等

窩窩頭(小さなトウモロコシ饅頭)

真珠餃子(西安の名物餃子)

美顔マッサージローラー(水晶玉柄五珠太平車、太平車) 等々

晩年の写真



向かって左から、瑾妃(珍妃の姉。光緒帝の妃)、徳齡(『西太后に侍して』の著者)、西太后、容齡(徳齡の妹)、徳齡姉妹の母親(フランス人)、隆裕皇后(西太后の弟・桂祥の娘。光緒帝の皇后)

【宣伝】 拙著 加藤徹『西太后一大清帝国最後の光芒』(中公新書、2005/9/1)864円

以上